

名古屋玄医 医案①

一貴人 季冬、大便秘を患う。壮年、肥大。諸医の用いる所、潤燥の補劑。全く応ぜず。一医 峻利を用いるも、猶お応ぜず。因りて蜜導を行う。予 之を脈するに洪大にして重く、按ずれば瀦して力なし。是れ、本より虚にして氣行われず。また少しく熱鬱有り。洪大は、補劑の成す所なり。大便の堅滑を問はば、果たして然り。結せずして秘するのみ。一方を用い一品を加う。

益元散 木香末を和す。

右、用藥、浚時 小便通快、大便もまた随いて行わる。丹水曰く、蜜導を行う事、惟だ陰虚 大便結するもの取る。峻利を用うべからずして之を用う。肛門を滑沢するのみ。結せずして惟だ秘するものには、宜しき所にあらず。今の医、鞭と不鞭とを問わず、其の秘を聞かば則ち峻利及び蜜を用う、豈に勤めざらんや。先輩 右用藥を評して曰く、益元散方中の滑石は九竅・六府の津液を通して留結を去る。乃ち別録の法なり。上能く表を発し熱を散じ、下水道を利して湿を去る。熱散ずれば則ち三焦 寧くして表裏和し、湿去れば則ち闌門通じて陰陽和す。乃ち『綱目』の言なり。

甘草は九土の精たり。中に居し緩あり。所故に下の其の上に至らんと欲するもの、中に非ずして其の上に至ることなし。上の其の下に至らんと欲するもの、中に非ずして其の下に至ることなし。則ち斯の品の黄中通理、緩やかにして、且つ和して以て、滑石の佐として、又其の神を尽くすなり。木香の用に二つ有り。天水を佐け、寒中に至らずして天和を伐たざるなり。是れ一つなり。大傷の気滞れば則ち便難し。之を使い以て其の気を順ならしむれば則ち乃ち、千たび塞がるもの之を通ず。是れ其の二つなり。